

令和 2 年 7 月 8 日現在

機関番号：35411

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K02653

研究課題名(和文) 清朝康熙年間における杭州詩人集団の詩会活動と地方文献編纂に関する研究

研究課題名(英文) Study about Qing dynasty

研究代表者

市瀬 信子 (ICHINOSE, NOBUKO)

福山平成大学・経営学部・教授

研究者番号：50176294

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：まず、杭州詩会の記録『西湖修禊詩』を調査し、この詩集が浙江という地方を強く意識し、当時の浙江に対する清朝政府の敵視に対する弁明と、浙江の文化的伝統の上にたって詩壇の記録を残そうとした意図を明らかにした。次に元初の『月泉吟社詩』の記録の変遷を研究し、清代に到り、詩社の詩が重要視されたこと、歴史資料、地方資料として扱われるようになったことを明らかにした。又、揚州と浙江の地方詩集を元に、詩会の詩人の記録を調査した。その結果、詩人の記録としては残らないが、詩会の詩が地方を詠ずる作として多数収録されていることを明らかにし、杭州詩人が地方を記録するための詩人として求められた実態を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

清代康熙乾隆年間に、杭州詩人は、揚州などの地方都市に移動し、詩会で活躍した。本研究は、詩人が各地の詩会に求められた要因について、地方誌の記録との関係から考察した。その結果、清代に到り、詩社及び詩会の記録が歴史資料として重要視されるようになったことを明らかにした。また清代は地方誌編纂が盛んになり、詩会の記録は地方誌の資料としても用いられた。そして詩会が、各地の地方誌の芸文志の他、名跡、風俗などを記録する際に用いられ、詩会で活躍する杭州詩人達がその作者として求められたことを明らかにした。地方誌と詩作、詩会との関連についての研究はこれまでになく、清代詩の新たな一面を示した研究といえる。

研究成果の概要(英文)：This study indicates that the Poems of the Xihu Xiuqi, records of Hangzhou Poetry Meetings held at the beginning of the Kangqian period, were compiled as regional literature to record the cultural traditions of Zhejiang and contemporary poetry circles. This study further clarifies that the Poems of the Moon Spring Poetry Society, came to be regarded as representative poetry of their era during the Qing Dynasty's Kangxi period, and that the poems of this Society were also elevated in status. The study further explains how Hangzhou poets made every effort to ensure that this poetry collection was preserved as historical material. Finally, this study shows how Hangzhou poets of different regions who were active in these poetry meetings used the ancient ruins and antiques of these regions in many of their poems, and created poetry with these regions as their themes. Hence, the so-called Zhe school poetry style in their poems was a form sought after by regional literature.

研究分野：中国文学

キーワード：清朝 詩会 地方誌 杭州

## 様式 C-19、F-19-1、Z-19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

(1) 国内においては、詩社や詩会に関する研究は、明末の政治結社へと変化した詩社に関するものがほとんどである。その中で横田輝俊『中国近世文学評論史』(溪水社 1990)は、詩社の構成員と共に文学的特徴を論じる貴重な研究である。横田輝俊「月泉吟社について」(『広島大学文学部紀要』第 14 号、1958)は、本研究が取り組む月泉吟社に関する論文として、国内では唯一のものであり、遊びの詩社としての月泉吟社を論じており、詩社を政治と切り離してとらえた研究として参考になる。大木康「黄牡丹詩会—明末清初江南文人点描—」(『東方学』第 99 輯、2000 年)は詩会に集う文人をとらえ、文学的分析を伴う研究であり、いずれも当該研究の詩会の意義を考える上で参考になった。しかし、いずれも清代以前の詩社の研究であり、清代詩社の研究はない。一方日本における漢詩社の研究たる揖斐高『江戸の文人サロン』(吉川弘文館、2009)同『江戸の詩壇ジャーナリズム』(角川書店、2001)は、詩会における詠史詩を、集団作成という特性から論じており、詩会の詩風に論じた点で本研究の参考になった。また、詩会ではないが、浅見洋二「文学の歴史学」(川合康三編『中国の文学史観』創文社、2002)は、詩に史の役割を求める文学観について論じ、個人の作についてではあるが、詩と記録についての考察は参考にするべき点が多い。これらを踏まえ、詩が集団で作られること、史の役割を担うことを、詩会の詩の制作の背景として捉え直すことができるのではないかと考えた。更に今回の研究では、地方誌及び地方詩集における詩会の記録を調査するのに、最も参考となったのが、松村昂『清詩総集叙録』(汲古書院、2010 年)である。当該書は、清代の地方詩総集について記載された日本で初めての記録であり、当研究にとって得るところが大きかった。

(2) 国外においては、何宗美『文人結社与明代文学的演進』(人民文学出版社、2011)、李玉栓『明代文人結社考』(中華書局、2012 年)など、明代の詩社の構成員を中心とした研究が進んでいる。清代の詩社の研究については、張仲謀『清代文化与浙派詩』(東方出版社、1997)がその嚆矢であるが、浙派詩人の文学的特徴を論じたもので、地域文化の中にある詩会活動には触れていない。一方清詩を地域性という視点からとらえようとする研究は、汪辟疆「近代詩派與地域」(『文芸叢刊』第一卷第二期)によって示され、その後、張仲謀の『清代文化与浙派詩』(東方出版社 一九九七)が、清詩を浙江という地方から論じて以後、地域性は清詩研究の重要な分野となった。蔣寅『清代文学論稿』(鳳凰出版社、2009)「清代文学與地域文化」は、清代に地域性のある詩文集が増大し、地方誌編纂のためにそれらが基礎資料となったことを指摘する。他にも地方詩集に触れる研究として、劉和文『清人選清詩總集研究』(安徽師範大学出版社、2016 年)等があり、総詩集という清代詩集の中に地域の位置づけが大きかったことを論じている。また地方誌における詩の採録に関しては、馬春暉「中国伝統方志芸文志研究」(国家図書館出版社)は、清代の地方誌芸文志に詩が採録されたことがことを論じている。詩会には触れていないが、地方詩壇の詩人達がいかなる活躍をしたかを考察する上で、非常に意義のある研究である。

以上の論考は、それぞれ詩会、地方詩派、清代詩総集、地方誌を個別に研究している。しかし、これらをつなぐものについての論考はない。これらをつなぐものとして地方詩壇の詩会をとりあげ、地方を移動した杭州詩人たちの活動が、こうした受容から生まれたことを明らかにしようとするのが本研究の新しさとなる。

### 2. 研究の目的

(1) 本研究は、清代に浙江、揚州等各地で盛んに開かれた地方の詩会の意義について、地方文献における、それら詩会の記録の残され方という面から考察する。更に記録という面から詩会の詩風など、を分析する。これらを通じて、詩と詩人を記録する様々な文献が地方ごとに盛んに生まれた時代に、詩会が果たした役割とは何であったかに迫るとするのが本研究の目的である。

(2) 具体的には、清代前半期に地方詩会が盛んになった。しかし詩会そのものの詩集は文学的価値を見出されず、ほとんど残っていない。そこで地方文献の記録の中から詩会の記録を拾い、当時隆盛であったにもかかわらず、消えてしまった清代詩をめぐる文化の一端を明らかにする。

(3) それらを通し、地方にいる無官で詩集刊行の資金のない無名の浙江詩人達が、各地の需要に応じて招かれ詩会に参加し、地方の文化の記録に貢献したこと、地方詩会が単なる交流の場ではなく、地方文献の編纂上、多様な意義を持ったものであったことを明らかにする。それにより、これまで見落とされてきた清代詩史の一面を明らかにすることが、本研究の大きな目的である。

### 3. 研究の方法

(1) これまで康熙乾隆期を中心とした杭州詩人集団の研究として、揚州、天津、杭州での活動と詩風の変遷について明らかにし、更に地方文献にそれらがどのように記載されているかを調査してきた。今回は更に地方文献に記録された詩会の詩や詩人の伝記が詩会の詩集を元とするものがどれほどあるかを調査し、地方文献と詩会との関連を明らかにする。地方文献として、地方詩会の詩集の他、地方誌の中に詩会あるいは詩会の詩、詩会の詩人がどのように記録されているかを調査する。地方誌については、清代以前の記録と比較しつつ、清代前半期の資料、清代後半期の資料などを時代別に取りあげ、それぞれの段階で詩会に関する記録内容、方法の変化を調査する。また地方詩集については、各地で編纂された詩集の中の代表的なもの、とくに歴史資料となることを意識して編纂された詩集を中心に調査を行う。具体的な手順は以下の通りである。

(2) まず詩会の中心地であった杭州における詩会の詩と地方文献の関わりについて、清代の詩会の詩集として最も大規模なものである『西湖禪禪詩』について調査を行う。この詩集の内容から、地方文献としてどのような意義を持ったのかを考察する。また収録された詩の詩風に関してのようのものであったかを調べ、地方文献として何が求められていたのかを明らかにする。つい

で、収録された詩人について、その伝記記録などを踏まえ、この詩集がなぜ編纂されたか、また地方文献としていかなる意味があったのかを明らかにする。

(3) 次に、調査対象として、元代初期の詩会の記録である『月泉吟社詩』をとりあげ、この記録が明代から清代に入り、どのように変化したかを明らかにする。当初はこの詩集を対象として研究を進める予定ではなかったか、研究を進めるうちに、詩会の詩の意味が、清代にいかに重要視されたかを示すために、最も重要な文献であると認識し、この詩集を取りあげることとした。『月泉吟社詩』の記録が明代から清代に移るにつれて、大きく変化したこと、またその時期が中国での詩会の隆盛の時期と重なることを明らかにする。また詩会の詩が一時的なものではなく、歴史上の記録とすべきものとして扱われるようになったことが、地方文献にも反映し、地方誌の中に詩会の記録が残るようになった嚆矢として、『月泉吟社詩』を研究し、そこから詩会の活動の活発化、杭州詩人が他地方から求められるにいたった時代背景などを探ることとした。

(4) 最後に調査対象として、揚州地方の詩集『淮海英靈集』と詩話である『広陵詩事』、浙江の地方詩総集である『兩浙輜軒録』を中心に、地方詩集、地方詩話における詩会の記録について調査した。これら三種の書籍はいずれも阮元が地方官僚として編集したものである。阮元は地方の記録を後世に残すことに熱心であった。揚州に関していえば、同時期に揚州で編纂された『揚州画舫録』を参照する。同書は特定の園林や名所で開催された詩会を記録するが、詩を中心とするのではなく、あくまでも場を中心として編纂されている。それぞれの地方文献の性格により、どのように詩会の記録が変化したかを、両者の比較から明らかにする。

また、揚州の地方文献は、杭州詩人が移動し寄寓した地方での記録であり、一方杭州の地方文献は、杭州詩人の故郷の記録である。他郷の詩会で活躍した詩人達は、それぞれの地方の記録にどのように記載されているのか、それらを詳細に調査することで、清代前期の地方詩会と移動して活動した杭州詩人たちの移動の理由、そこから生まれた成果を明らかにする。また浙派と呼ばれる杭州詩人を中心とした詩風に関しても、詩会という視点から新たな答えを見いだせると考える。

#### 4. 研究成果

##### (1) 『西湖修禊詩』について

杭州詩人集団の詩会活動と、地方文献編纂との関連を明らかにするために、まず杭州を代表する詩会の記録である『西湖修禊詩』について研究を進めた。

①乾隆西湖修禊は、中央から派遣された官僚が主催し、杭州を中心とする浙江の詩人が参加した詩会である。官僚鄂敏の序は、前半では『論語』の沂水の記事を引用し、六朝の典故によりつつ、修禊の詩が宴会の詩というに留まらず、「詩教」という儒教の教えを体現するものであり名教に則るものであることを強調する。そしてそれを体現したのが王羲之による蘭亭の会であり、更に後世にも同調するものがなければならないと述べる。それこそが西湖修禊なのである。鄂敏は、西湖が風光明媚な地であることには触れず、文化的な伝統の上に立つこと、「詩教」という大義に合うものであることを強調する。序の後半では、西湖修禊は、王羲之の蘭亭会に倣うという姿勢を貫くのであるが、倣うべきは詩教つまり文学で地方を教化することであると、歴史的には文学の遊びを主とするとされる修禊を、地方の教化のための行事と位置づけるのである。このように修禊を教化とし、主催する自分の官僚の役割を強調しているのが鄂敏序の特徴である。

一方、杭州詩人周京の後序は、浙江という地が修禊の文学の中心地としての伝統を担っていること、またこの地の平穏と人材の温和、そこに生まれる文学の穏やかであることを述べ、その象徴として「西湖修禊」を位置づける。これらは当時反政府的として中央から危険視されていた浙江の安定を示し、文化の地たることを訴えるものであり、『西湖修禊詩』が、修禊という行事のためのものというよりも、地域を意識した詩集であることを示している。

②次に修禊という行事を出版と記録という視点から考察した。王羲之の蘭亭詩宴が詩人を記録し、後世に伝えることを意識して編纂され、記録に残されたことに始まり、その当時の地域の詩人を伝える役割を修禊詩は果たしてきた。唐の白居易は洛陽の詩壇を記録し、元の劉仁本の修禊は、会稽の詩人を記録しようとした。特に詩会の詩集の刊行が盛んになった清代では、王士禛が揚州で開いた紅橋修禊では各地からの参加者7000余人の和詩を集め300余巻の詩集が刊行される。しかし詩集自体は残っておらず、『西湖修禊詩』のように完本で残されたものは、ほとんどない。西湖修禊詩に収録される詩人85名は、大半が杭州詩人を中心とする浙江詩人であり、地域色の強い地方詩集でもあったことが、地方資料として詩集を残すことになったと考えられる。

この詩集が後世にどのような扱いを受けたかを見てみると、呉振棫編纂の『国朝杭郡詩統輯』には、西湖修禊の参加者が収録され、『西湖修禊詩』は資料として活用されている。本来官僚鄂敏の主催であったはずだが、ここでは杭州詩人杭世駿が主催したとしており、より地方色の強い詩集として扱っている。また『西湖修禊詩』は、杭州の文献には残されるものの、浙江を代表する『全浙詩話』には記載が無い。このことから、当該詩集は、杭州という閉じられた一地域の詩集という扱いを受け、杭州の地方文献としての価値を見出されたと考えられる。

一方同時代に揚州で開かれた修禊は、揚州以外の参加者が大半であり、外に開かれた修禊であった。そのため、却って地元で記録が残らなかったと考えられる。

##### (2) 『月泉吟社詩』の記録とその変遷

詩会の詩の記録がどのような価値を持っていたか、地方誌にどう取り入れられたかを歴史の変遷から見るために、元代初期の『月泉吟社詩』について考察した。

①元代初期に浙江の地で、南宋の遺民吳渭によって開催された詩会の記録が『月泉吟社詩』であ

る。詩会の方法としては、「春日田園詩」の詩題で詩を募集し、2735名の応募者を集めた。いわゆる詩のコンクールである。応募者のうち280名を選出して発表し、更にその中から60名、詩74録を収録し、聯句図として32聯を収録したものが『月泉吟社詩』となる。汲古閣本『月泉吟社詩』（『詩詞雑俎』所収）では、最初に田汝耔「刻月泉吟社叙」、続いて「月泉吟社」と表記した社約、「春日田園題意」、「誓詩壇文」、「詩評」と続く。投稿者の記録は、寓名つまりペンネーム、地域、本名、号、所属詩社などが記され、当時の浙江詩壇の記録ともなっている。

②元王朝ではほとんど記録が見当たらないが、明代になると、この詩集は再刊され、各種文献に取りあげられることとなる。李東陽の『懷麓堂詩話』は、詩会の貴重な記録としてとりあげるが、李詡『戒庵老人漫筆』では、やや詳しく概要と詩集の構成を記録する。明末清初の錢謙益は宋の遺民の記録として取りあげ、とくに主催者たる吳渭に焦点を当てている。いずれも詩集に収録された詩人、詩句には触れていない。

③清代に入ると、当時名のあった王士禛が、受賞詩の順序を入れかえたものが『池北偶談』に収録され、詩句を作品としてとりあげる動きがここから始まる。つづいて、康熙年間に『御選宋金元明詩』において、『月泉吟社詩』の詩と詩人が多数採録されることとなる。ただし、月泉吟社の名はどこにも記されず、詩題「春日田園雜興」によってそれがわかるのみである。ここには、42名の詩人が収録されるが、その大半は他に詩集も詩も残されておらず、この『月泉吟社詩』によってのみ採録される。詩社の詩集という雑誌扱いの刊行物に一首作品が載っただけの詩人が、時代を代表する詩人として採録されたのである。このことは、清代における詩社、詩会の位置づけが大きく変化した転換点を示すものである。『御選宋金元明詩』は『月泉吟社詩』に基づき詩人の小伝を記すが、一部加筆し詩人の記録としての充実を図る一方、詩社に関する記述は省く。これは結社禁止の時代であったための処置と考えられる。詩会の詩集が歴史的文献となりうることを示したのが『御選宋金元明詩』である。

④『南宋雜事詩』は、厲鶚ら7名の杭州詩人による、南宋の遺事を題材とした詩集であるが、巻七趙信の中に『月泉吟社詩』について記す。まず月泉吟社を題材にした詩を詠じ、そこに関係する注を施しているのだが、月泉吟社に関する注は、この詩集の中で最も分量が多い。まず、『月泉吟社詩』の編纂者吳渭について記し、続いて参加者数、賞品、収録詩人数、記名の方法、重複の有無など詳細な構成をしるし、つづいて詩人名と伝記を記す。『御選宋金元明詩』で省略された、ペンネームだけの「摘句」に登場する詩人も収録され、また詩社の名も収録する。詩句こそ載せないが、詩人の記録としては、『御選宋金元明詩』よりも詳しいものとなっており、より歴史資料としての色合いを強めている。

④杭州詩人厲鶚による『宋詩紀事』は、連文鳳の項に「以下月泉吟社」とし、37名を収録し、また摘句として詩人と詩句を収録する。小伝については、本名の明らかにできるものは本名を先にし、寓名のみものはそのまま記し、更に新しい情報も加えて記録を正確なものにしようとする姿勢が見える。更に詩人だけでなく、幾人かの詩人については「送詩賞小劄」「回詩賞劄」も採録し、詩人別の総集にもかかわらず、それに収まらない月泉吟社の情報を記録している。これは詩社そのものを記録として残そうという強い意志を示すものである。こうした記録が清代詩会の領袖であった杭州詩人によって残されたことは注目すべきことである。

④最後に、地方誌の中に『月泉吟社詩』がどのように取り入れられたかを調査した。すると、月泉吟社が開催された金華府では、明代の『万曆金華府志』に月泉吟社の記録はなく、清初の『康熙金華府志』にも記載がないが、清末の『光緒金華県志』には記載がある。また『杭州府志』も『万曆杭州府志』には記載がなく、『乾隆杭州府志』には、『宋詩紀事』を典拠として月泉吟社の参加詩人の記載が見える。他地方誌も、明代には記載が無く、清代に月泉吟社の記載が見え、清代が地方史における詩社の記録の転機であることがわかる。また自らが清代詩会の中心となっていた杭州詩人の作品が、地方誌への資料提供を促したことがわかる。

このように、月泉吟社の記録を通して、清代が詩社の詩を評価し、また歴史資料、地方史資料として扱われるようになったことを明らかにすることができた。こうした研究は前例がなく、詩社の記録について新しい研究成果を提供できたと考えられる。

#### (4)『広陵詩事』と『淮海英靈集』における詩会の記録

①『広陵詩事』は、清代の学者である阮元が著した、清代初期から中期における揚州の詩の記録である。阮元は『広陵詩事』が刊行された前年、清代初期から中期における揚州詩人を収録した『淮海英靈集』を完成させている。『淮海英靈集』は、揚州で生卒した者のみを収録するため、他地域からの流入者を記さない。また詩会についての記載はない。一方『広陵詩事』は、同時期の揚州を対象に、『淮海英靈集』に収録しきれなかった詩にまつわる様々な事柄を記録したものである。その中でも特に興味深いのは、詩会に関する記述である。揚州は清代前半期、詩会の地としてその名を知られた。揚州詩会の特徴は、外の地域から訪れた多くの詩人によって隆盛を迎え、全国に名を知られるようになったことにある。それを全て省いて揚州人のみを集めた『淮海英靈集』は、揚州人の記録としては貴重であるが、当時の揚州詩壇の実像を伝えることはできない。『広陵詩事』はその欠を補う役割を果たしている。

②揚州詩壇を代表する詩会は、韓江雅集である。その中心となった塩商が馬日瑄、馬日瑄兄弟である。彼らが『淮海英靈集』と『広陵詩事』それぞれの中でどのように記録されているかを調査すると、馬日瑄の小伝には彼らの詩会のこと、詩会の場であった小玲瓏山館、『韓江雅集』には何一つ触れていない。そうした文学活動があったこと自体が無視されている。『韓江雅集』からの採録は一首にとどまる。弟の馬日瑠については、「蔵書謙集之地」としてその館を挙げ、「邗江

雅集」に彼の詩が見えることに触れる。ただ、他地域の詩人たちとの盛んな交流や詩会の実態には触れることがない。また『韓江雅集』から詩を採録することもない。結局、詩会の隆盛については、ほとんど記録されていない。『韓江雅集』中、登場回数が馬氏兄弟について多いのが関華であるが、関華の項目にも詩会に関する記述はない。また詩会の主催者の一人、陸鍾輝の項には、彼の経営する「讓圃」が「邗江雅集之地」であったことが記されるが、共同経営者であり詩会の参加者でもあった張四科は採録さえされていない。詩集としては、やはり個人の活動を記録し、詩会についての記載は極力抑えているのが『淮海英靈集』の特徴である。

③一方『広陵詩事』は、各所に詩社に関する記録、他郷の詩人たちの記録を採録し、揚州詩人との交流の盛んであったことを記す。とくに、巻六では、『淮海英靈集』に採録されなかった張四科の「讓圃記」を全文採録し、詩を紹介する。また他にも揚州の各地で開催された詩会が、他の資料には見えない詳細さで記される。『淮海英靈集』には記されない詩人達の文学活動が、ここには記されているのである。その中には、杭州から訪れ活躍した厲鶚や当時揚州で人気を得たという陳章などの名も見える。ただし、彼らが詩壇でもてはやされたことは記されない。揚州で最も大規模な詩会であった王士禛の紅橋修禊に関しては、非常にあっさりとして記録するのみであり、盧見曾の大規模な詩会についても触れることがなく、詩会的主催者が揚州人である時のみ詳細に記録する傾向がある。巻七には『韓江雅集』の記録がある。他郷の詩人が多かったこの詩会の其郎は、名前の後ろに出身地と身分に関する注をつける。ただ、最も熱心に記録しているのは、詩題の解説、とりわけ揚州の名跡の解説である。これもまた揚州の地域文化の記録に徹しており、他地域からの詩人が大きく取りあげられることはない。揚州で最も長く活躍した陳章の扱いも大きくはない。しかし陳章の詩がそこには四方の文人学士が揚州を訪れ、詩会の隆盛を迎えたことが記されている。

『広陵詩事』は、揚州の記録として、詩会や他郷の詩人を記録するものの、やはり主体は揚州人である。阮元の記録の中では、他郷の詩人達はその活躍が埋もれていくこととなる。ただし、同時代に揚州で刊行された李斗『揚州画舫録』は、文学ではなく地域の記録として編纂されたものであり、この中には杭州詩人が、韓江雅集など詩会の参加者として詳しく記される。これは李斗の態度が、地域の隆盛を伝える記録たることを目指したため、多くの詩人を記録することに力を入れたためであろう。しかし、『揚州画舫録』は、阮元の詩集、詩話に比べ、資料的価値は低いとされた。故に杭州から出向いた詩人たちは、揚州での足跡を、容易に地方詩集、地方詩話には残せなかったのである。

#### (5) 『両浙輶軒録』と地方誌における杭州詩人と詩会の記録

①阮元が同時代に編纂した浙江の『両浙輶軒録』は、杭州を中心とする浙江の詩人たちを収録している。揚州で取りあげられることがなかった杭州出身の詩人達が、故郷の詩集でどう扱われるのかを調査した。すると、こちらの詩集でも、他郷に出て活動した詩人たちの記録は乏しく、作品も収録数が少ないことがわかった。これは編纂時の資料に、浙江で編纂された地方詩総集を用いたため、他郷で詩作していた詩人たちの資料が少なかったためと思われる。同じ詩会でも、杭州詩壇で活躍した詩人については、資料も詩も多い。よって、康熙年間から乾隆年間にわたり、故郷以外の地方都市で活動した詩人たちは、地方の詩の記録の中では埋もれた存在になってしまっていることがわかった。当時の知名度に反し、後世に彼らの名が残らなかったのは、地方に拘った詩集が多く編纂され、その隙間に移動した詩人たちは入り込み、見過ごされたためと考えられる。

②しかし、彼らの伝記は残らなくとも、彼らの詩は地方誌の中に数多く残されている。それは各地の名跡、風俗、骨董などを記した篇においてである。清代の地方誌の特徴は、地方を特徴づけるものを詩に詠じ、その記録を掲載することが盛んに行われたことである。芸文志は、従来書籍を中心とする文献を掲載するものであったが、清代の地方誌では、当地を主題とした詩文を掲載することが中心となった。こうした詩は、多くが当地で開催された詩会での作となっている。多くの作品を集めるに、詩会は利用されたのである。そして移動して活躍した杭州詩人たちは、個人の詩人としては後世忘れられていったかもしれないが、各地の地方誌を豊かにする作品の作者として各地の地方誌に、地方を詠じた詩とその名を留めることとなった。

③杭州を中心とする詩人たちは浙派と呼ばれ、その詩風の特徴の1つに、名跡、骨董を詠ずることが挙げられる。また典故が多いことも挙げられる。これらは各地の詩会で活躍した杭州詩人達が、当地の蔵書家のもとに寄食し、蔵書を用いて、当地をアピールするという目的で求められたゆえのことであることが、これらの調査から推察できる。

詩派の特徴たるものが、地方誌編纂に絡む需要から来ていたものであることを明らかにしたのが本研究の特徴であり、これまでの清代詩史の新しい一面を切り開く手がかりになると考えられる。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 市瀬信子	4. 巻 15
2. 論文標題 『月泉吟社詩』の記録とその変遷	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 経営研究（福山平成大学経営学部紀要）	6. 最初と最後の頁 1-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 市瀬信子	4. 巻 14
2. 論文標題 序から見た『西湖修禊詩』	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 経営研究（福山平成大学経営学部紀要）	6. 最初と最後の頁 1-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 市瀬信子	4. 巻 71
2. 論文標題 杭州地方文献としての『西湖修禊詩』	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 中國中世文學研究	6. 最初と最後の頁 1-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 市瀬信子	4. 巻 16
2. 論文標題 『広陵詩事』における詩会の記録	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 経営研究（福山平成大学経営学部紀要）	6. 最初と最後の頁 1-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 市瀬信子
2. 発表標題 清代詩会における六朝詩の遊び
3. 学会等名 中国中世文学会平成30年度研究大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 市瀬信子
2. 発表標題 西湖修禊詩-詩会の記録という観点から-
3. 学会等名 中国中世文学会平成29年度研究大会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考